

日本経済の故障箇所

東京都立大学経済経営学部教授

脇田成
わき した しげる

- * 1998年が国民経済計算上の分水嶺に
- * 巨額な企業の内部留保はどこへ行ったのか
- * この30年間の3つのショックと2つの改革
- * 失われた家計の消費する力
- * 家計の少ない株式保有も影響
- * アベノミクスとは何だったのか
- * 実は儲かっていない海外投資
- * 続く場当たりの政策対応
- * 家計を豊かにする方法は何か
- * 弱くなった労働組合の拮抗力



山縣 それでは開会いたします。（拍手）

今日の講師をご紹介します。東京都立大学経済経営学部の教授であられます脇田成先生をお招きしました。

実は私は仕事柄、出版社の広告のところは全部見る癖があるんですけども、ある日『日本経済の故障箇所』という本のタイトルを見まして、これは何なんだろうと。確かに日本経済は故障しているけれども、たぶんこの本は故障の原因とかがいろいろ書いてあるに違いないと気になりました。次の日、事務所に出て、事務局長に面白いんじゃないかという話をしましたら、もう既に読んでいて、内容は面白いと。こうした評価の仕方です。先生のお考えを一度聞

いてみようじゃないかということで今日はお越しいただきました。

日本評論社の編集者の方に来ていただいて、先生の『日本経済の故障箇所』を売っておりまして、ご興味のある方はお手に取っていただければと思います。

『日本経済の故障箇所』というタイトルですが、普通先生は嫌がって、編集者がこういうものにしたと言ってもめるんですけども、これは先生がおつけになったタイトルだそうですので、ちょっとびっくりしました。

先生は東京大学経済学部を卒業されまして、吉川洋先生とか、岩井克人先生の下で勉強されまして、大学院も経済学研究科で修士を修了されて博士号を取得されていらっしゃいます。東